

【書評】

藤井誠一郎

『ごみ収集という仕事 清掃車に乗って考えた地方自治』
2018, コモンズ

佐山一郎

書目にもあるように、本書の場合は「ゴミ」ではなく「ごみ」で統一されている。このまま不統一のままでもよいと思われるが、片仮名表記の「ゴミ」を禁止する企業体も出てきているようだ。揶揄語、差別語として捉えられることへの自主規制なのだろう。

そこで、『記者ハンドブック 第13版 新聞用字用語集』（共同通信社・2016年）と『最新用字用語ブック〔第7版〕』（時事通信社・2016年）の2冊をあたってみることにした。しかし、現状、片仮名表記の「ゴミ」を「差別語・不快（用語）」に入れているところはなかった。

調査記録方法の一つとしてあるガーボロジー（ごみ調査/Garbiology）には、元々メディアジャーナリズムとの親和性があった。代表的著作として思い出されるのが、瀬戸山玄著『東京ゴミ袋』（文藝春秋・1988年）である。菊地信義装幀によるその『東京ゴミ袋』では、本の背の反対側（前小口）と天地を墨色に塗ってしまう細工がなされ、ノンフィクション隆盛期ならではの試行と「ごみ」にまつわる単一イメージの根強さを物語っている。事実をキャッチしようとするジャーナリズムの活力源（＝好奇心）へののどかな信頼に支えられている著作だった。

同時期に刊行された山根一眞著『ドキュメント 東京のそうじ』（PHP研究所・1987年）では、「掃除」を「そうじ」にしている。

原稿整理中の編集者のあいだでは、漢字を避け

て平仮名表記にすることを「開く」と言う。この「そうじ」表記からは、巨大都市の消化器官を切開し、そこに入って行こうとするエネルギー的な意図がうかがえた。著者の山根は人糞のみならず、東京競馬場の馬糞の行方までもを追跡した。『ヴィクトリア時代 ロンドン路地裏の生活誌 <上><下>』（植松靖夫訳/原書房・2011年）で知られるヘンリー・メイヒュー（1812-1887年）を影響源にもつスタッズ・ターケル（1912-2008年）のインタビュー集『仕事（ワーキング）！』（原題“Working”・1972//晶文社・1983年）にも、「ごみ処理トラック運転手ニック・サルノー」（p.167-169）と「ごみ回収 ロイ・シュミット」（p.170-172）の口述が、それぞれ3千800字程度で収録され、強いインパクトを放っている。

版元の晶文社編集部によると、2段組み700頁超えの厚本である『仕事！』は、初版4千部、3千800円でスタート。97年に20回目の最終増刷をし、トータル3万4千部に達したという。130人以上のインタビュー者を数える同書は、80年代の西欧を中心に活発化したオーラル・ヒストリー（口述史）の日本での受容を後押しした古典的著作でもある。ただ、「聞き書き」はすでに民俗学における言わずもがなの調査方法だった。

細読前の予備考察はおおよそ以上のようなことだが、少なからぬ読者を獲得しつつある本書『ごみ収集という仕事』（四六版261頁）からは、体験

的ジャーナリズムとの相互浸透性がうかがえる。アメリカの文学的ジャーナリスト、ジョージ・プリンプトン（1927-2003年）が1960年代にプロ・スポーツ界に分け入り、投手、ゴルファー、サッカーのGK、闘牛士などに挑戦した20種類近くの体験記録を彷彿させるからだ。失敗する自分までもを含めて外界を目撃しようとする一人称文体は、沢木耕太郎作品にも影響を与えた。

しかし、本書の著者・藤井誠一郎（大東文化大学法学部政治学科准教授・1970年-）の場合は、プリンプトンのような華やかさとは無縁。「一現業職員」として〈新宿東口清掃センター〉に通った。体験調査（参与観察）を通じて、文字通りの労作『ごみ収集という仕事』を以下のように構成している。

- 〈現場主義を貫く〉（プロローグ）
- 〈初めてのごみ収集〉（第1章）
- 〈研究者が体験した収集現場〉（第2章）
- 〈多様な仕事〉（第3章）
- 〈委託の現場〉（第4章）
- 〈清掃行政の展望〉（第5章）

確認しておきたいのは、自治労（全日本自治団体労働組合）本部が出入り口になっていることだ。行政学の研究者である藤井は、自治労の「次世代を担う研究者育成制度」によって採用されていた。

ゆくたてが次のように明かされる。

「筆者が希望したいくつかの部署のうち、現場に入ってもよいという返事をすぐにいただいたのが清掃部門である。こうして、偶然にも、大学院生時代に多大な衝撃を受けた寄本（勝美）先生と同じフィールドに身を置くことになった」（p.6-7）

しかし2カ月間の清掃体験では、「お客様待遇」。深い現場理解のための継続が認められ、プラス7カ月の日程を全うした成果が、表①「調査日程と参与観察内容」（2016年6月13日～2017年3月31日）と共に以下のように記されている。

「ごみの量がピークを迎える年始は三日連続で作業し、現場での収集作業をほぼ理解したという感覚を持つことができた。夏の暑い日から冬の寒い日まで、ほぼ一年を通して現場を観察でき、清掃行政について語る「権利」を多少は得られたのではないだろうか。／当初は収集・運搬しか見えていなかったが、徐々に中間処理、最終処分という一連の流れが視野に入るようになった。清掃工場や東京湾の最終処分場の見学会にも参加して、清掃行政の全体像を体系的・俯瞰的に見られたと思っている」（p.9）

問題解決につながる実践知の多さは、やはり苦労したインタビューによるところが大きい。話し手との信頼関係の構築がうかがえるのは、〈第4章 委託の現場〉である。本書の主題でもある業務「委託」の実態が、20代から60代にかけての委託作業員5名と、都事業からの引き継ぎである雇上（ようじょう）会社の運転手2名（うち女性1名）へのインタビューによって浮き彫りにされる。文字量としては、一人当たり500字から1,900字とばらつきがあるが。

すべて仮名、年齢は推定というあたりでは、自治体の名が伏せられていた坂本信一著『ゴミにまみれて——清掃作業員青春苦悩篇』（径書房・1995年）での困難が想い起こされる。この上さらに、他の地方自体との比較までもを本書に求めるのは酷というものだろう。

スプレー缶、ライター、カセットボンベ、電池、蛍光灯などの危険を伴う可燃ごみと資源を取り出す破袋選別作業の体験を集約した藤井は、〈第2章 研究者が体験した収集現場〉で次のように述べている。

「危険を伴う仕事を外注するのではなく、公というバックボーンに守られて、安心して業務を遂行できる体制にしていくなさきであろう。そうした環境を用意していく懐の深さが公務労働にあってよいはずだ」（p.87）

しかし、新たな監視体制につながる可能性がある提言は疑義を抱かれやすい。清掃リソースによ

る地域情報活用の究極形は、以下のように最終〈第5章 清掃行政の展望〉でも繰り返される。「……清掃職員が収集現場でつかむ情報は役に立つ。民泊の宿泊者には、ごみ出しや分別のルールが徹底されない。指定された以外の曜日に、分別もされず出されるケースが多い。それらを破袋調査すれば、宿泊者と業者との連絡文書、宿泊者施設への行き方や設備の説明、鍵の授受方法などが含まれている。そこから、警察との協力体制のもとでの取り締まりが可能となる」(p.227-228)

一歩踏み込んだ高揚気味の記述は、経験主義特

有の情緒的一体感がもたらす距離感の失調なのだろうか。さはさりながら、本書が調査系社会学の停滞を破る突破口になっていることは確かである。閉鎖的組織に突きつけられている外部委託の問題は、清掃の現場だけにどまらない。

ジャーナリズムに長く重心を置いてきた評者としては、ネット社会が増幅させる他者恐怖の時代に抗う、藤井の体当たり調査に軽いジェラシーすら覚えた。人物像優先で、組織全体の文化に興味を持つことを苦手に行っているのが、日本のジャーナリズムであるからだ。